

俳句、その滑稽の歴史

日根野 聖子

貞門、談林の流れに身を置きながら、それらの俳風とは違う、これまでの技法や表現を超えた新しい境地を求めたのが、松尾芭蕉であった。芭蕉は、戯れの俗文学として見下されていた俳諧を、伝統的な和歌や連歌と同じ位置に高めることに生涯をかけたのである。

芭蕉は、俳諧を次のように定義する。「俳諧といへども風雅の一筋なれば、姿かたちいやしく作りなすべからず」(「旅寝論」去来)。これは、俳諧が俗な題材、表現を扱い、笑いを求める文芸であっても、卑俗に作ってはならない。俳諧も、芸術性を備えたものでなければならないということである。また、次のような言葉も残っている。「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其の貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし」(「笈の小文」芭蕉)。これは、伝統的な和歌や連歌に対して、新興の俳諧という文芸に身を置いてきた芭蕉が、俳諧をいかに文芸上の高い位置に位置づけようとしていたかが窺い知れる。文中の風雅とは、芭蕉の目指した俳諧のことを意味し、西行、宗祇、雪舟、利休という超一流の人物と芸術に、自身と俳諧を位置づけている。天地自然を創造した力に従い、四季の変化を友とする俳諧の精神があれば、見るもの花のように美しく、思うことは月のように清らかになると、俳諧をする者の心構えが説かれる。

これらの言葉からも、芭蕉の俳諧への並々ならぬ思い入れと、一流志向、本物志向が窺える。しかし、芸術性を高め俳諧の地位を高めんとしたこと

が前面に出たために、俳諧の主役であった滑稽が、いつの間にか端役として舞台の隅に押しやられることにもなってしまった。芭蕉の死後、門人達は各自勝手な方向にすすんで論争が起こり、蕉門は、分裂、墮落していくこととなる。

芭蕉没後五十年たった頃から、しだいに芭蕉回帰、蕉風復興の気分が生まれたが、統一した動きとはならなかった。この頃、南宋の画論から離俗論を唱え、俳諧は俗語によって表現しながら俗を離れなければならず、俳諧を修行するとは心位を高めることであると主張したのが与謝蕪村であった。蕪村は、古典を重んじ、漢語や雅語を好んで用い、客観的、絵画的、浪漫的な俳風を打ち立てた。

蕪村の後、文化、文政時代になると、俳諧はますます世の中に広まったが、再び通俗化し、平明で遊戯的な俳風に傾いた。この頃、俗語や方言、俚言を用いて素朴で庶民の生活感情を詠み、強烈な個性を放ったのが、小林一茶である。

一茶は、幼い頃の父親の再婚や、自身の妻との死別や離婚、何人もの子どもを亡くすという数々の不幸を経て、小さな生き物や弱者擁護の視点をもった滑稽味のある句を残している。

この後、俳諧は天保、幕末を経て明治に入り、俳諧から近代俳句の時代へと移っていく。